大阪樟蔭女子大学論集第44号（二〇〇七）

新収集資料に見る大正～昭和初期の樟蔭学園

― 樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用（5）―

白川哲郎

要旨

本稿では、二〇〇六年四月から八月までの間、筆者が新たに収集することができた樟蔭学園関係資料を紹介しながら、それらから窺い知ることができる、大正～昭和初期の学園の実態について考察した。

まず、二つの絵葉書セットを紹介した。一つは一一九二五年四月以前の大正期に発行されたもので、それら十九枚の絵葉書は、樟蔭高等女学校の優れた施設・設備を印象付ける内容となっており、設立に関わった人々が理想としたところを読み取ることができる。また、一九三五年の会館完成後間もない時期に発行されたと考えられる、もう一つの絵葉書セット七枚は、昭和一桁代の時期に定着した「樟蔭ブランド」を象徴するものとなっていることを指摘した。

次に、一九一八年の樟蔭高等女学校開学とともに着任し、一九三七年までの約二十年間、学園の教育、特に体育教育を支えた朝輝記太留氏の経歴や同時代評価、さらには新たに収集、確認した著述を紹介した。そしてそれらから、初期においてはスウェーデン式体操の普及に大きな役割を果たしていた朝輝氏が、樟蔭着任前後からは、学校ダンスの指導者として活躍したことを確認した。さらに、朝輝氏の体育教育、特にダンスは当時の「最先端」にあったことも指摘した。ただ当時の社会的状況を反映して、昭和初期のそれには、国家主義的思想を助長する一面を内包していたことにも注意を喚起した。

はじめに

樟蔭学園記念館は、二〇〇六年三月、国の登録有形文化財となった。その記念館一階には学園資料展示室があり、樟蔭高等女学校（以下、「樟蔭高女」と記す）設立以来、樟蔭学園（以下、「学園」と記す）各校のさまざまな資料が保管されている。筆者らは、二〇〇三年度からそれらを整理しながら、仮目録を作成し、その一部をデータベース化する作業を行ってきた(1)。また、その過程で〝再発見〟した、樟蔭女子専門学校（以下、「樟蔭女専」と記す）の職員会議(教授会)の議事録である『職員会誌』や、昭和十年代初めの学園広報誌『樟蔭學報』をもとにして、昭和初期の学園や樟蔭高女・樟蔭女専の具体相についても、その一端を明らかにしてきた(2)。

学園資料展示室には、これまでに紹介することができた『職員會誌』や『樟蔭學報』以外にも数多くの貴重な資料が保管されており、それらの整理に努めなければならない。ただ、それらをもとに学園の歴史とその特色について検討を深めて行くには、それらを補う資料の必要性を痛感している。そこで今年度からは、学園資料展示室の資料の整理、デー

タベース化の作業と並行して、学園内外に散在する関係資料の収集にも可能な限り着手することにした。

本稿では、二〇〇六年四月から八月までに、筆者が新たに収集することができた資料の紹介を兼ねつつ、それらから窺い知ることができる、大正～昭和初期の学園の実態について若干の考察をめぐらせてみたい。

Ⅰ　二つの絵葉書セット

学園外にある学園関係資料の収集を開始し、その収集網に最初にかかってきたのは、大正から昭和初期の学園の様子を撮影した写真による二種類の絵葉書(セット)であった。まず、この二種類の絵葉書セットを紹介することから始める。

①絵葉書セット1

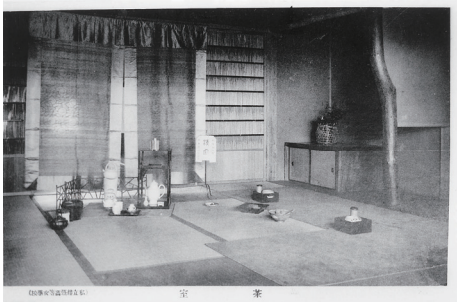
まず、そのうちの一セットを示そう（十三～十五ページ参照）(3)。

この絵葉書セット1については、No.1の正門の写真を見ると、記念館が未だ建てられていない時期のものであることが判る。したがって、この絵葉書セットが発行されたのは、記念館が建設される一九二七年（昭和二）度以前のことであることは確実である。さらに、絵葉書セットの外袋には「樟蔭高等女學校絵葉書」とあって、樟蔭高女のみが発行主体となっており、それからすれば、一九二五年（大正一五）の樟蔭女専設立以前の発行であることも間違いないであろう。一方、No.18の作法室階上広間の写真には、正面に「端操清静」と書された伏見宮文秀筆の扁額が飾られている。伏見宮は一九一九年（大正八）六月一〇日に樟蔭高女へ来校したが、それ以前、おそらくは樟蔭高女開校の頃に前記扁額が下賜されたと推測される(4)。以上のような点からすると、この絵葉書セット1は、一九二五年四月以前の大正期、おそらくは、樟蔭高女開校からそう遠くはない時期に発行されたものと考える。

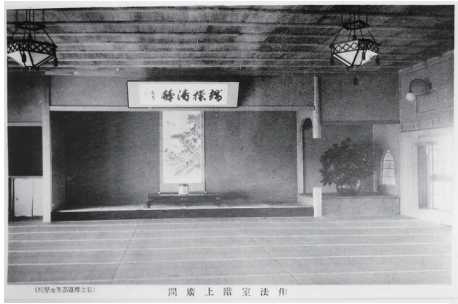
②絵葉書セット2

次にもう一つの、絵葉書セット2である（十六ページ参照）(5)。

絵葉書セット2は、No.5・6それぞれに、上棟式が一九三五年（昭和一〇）二月二七日に行われた会館(6)の外観と内部とが写されていることから、一九三五年二月以降の発行と考えられる。さらに、No.6会館内部の写真中、その正面に飾られている校章は菊水である。同じくNo.3の写真の中にある校旗の校章も菊水である。第二次世界大戦中、樟蔭の校章が菊水から桜水に変更されたことが知られているが、その変更がなされたのは、一九四一年（昭和一六）五月八日のことであった(7)。とするならば、この絵葉書セット2が発行されたのは、校章が変更される以前のことと考えてよいであろう。ところで、No.6に関して、現在伝えられている会館の写真の多くが正面向かって左に富岡鉄斎の「富嶽図」(8)が飾られていることが多いことを考慮すると、会館の完成後間もない時期の写真が使用されているものと推測される。これらの点からするならば、絵葉書セット2は、会館完成後間もない時期、すなわち一九三五年中に、会館の完成を記念して発行されたものと判断して良いのではないだろうか。



No.18 茶室



No.17 作法室階上広間

No.19 茶室庭園

③絵葉書が伝えたもの―建学の理想と「樟蔭ブランド」―

橋爪紳也氏は、「のどかな田園風景のなかに」著名なウィリアム・ヴォーリスの設計した校舎が建ち並んだ関西学院の光景を写した絵葉書を紹介して、「当時の経営者たちは、わざわざ都会の喧噪から離れた静かな里を選らんで、理想的な教育の場を設けようとしたのだろう」と指摘している。また、キリスト教精神に基づいて設立されたプール女学校の寄宿舎における女学生の姿を写した絵葉書を紹介し、「寄宿舎での暮らしは、まったくの和風だが、彼女たちの心には西洋的な思考と信念が伝えられたことだろう。少なくとも絵はがきを手にした者は、彼女たちの姿から女性が学ぶことの意義を理解したのではないか」と指摘している(9)。こうした橋爪氏の指摘に学ぶならば、今回入手することができた絵葉書セットについても、以下のような点を読み取ることができるであろう。

絵葉書セット1について言えば、絵葉書を手にした人々は、当時の樟蔭高女の施設・設備の良さに驚かされたのではないだろうか。No.7講堂やNo.8貴賓室・No.9図書室・No.10集会室の写真からは、それらの部屋の広さや立派さがうかがわれ、樟蔭の豊かな教育環境を実感することができる。さらに、最新の設備を整えたNo.11洗濯室・No.13化学実験室及び天秤室・No.16割烹室の写真、加えて小さいながらもNo.14の器楽練習室の写真は、当時の最新かつ十二分な設備が整った教室・施設の実際を、絵葉書を見る者に印象づけたに違いない。No.14音楽教室やNo.15図画教室の写真、さらにはNo.5の当時としてはたいへん珍しかった木煉瓦を使

用した運動場の写真についても同様である。

加えて、№17作法室階上の広間や№18茶室の写真は、施設や設備の立派さを伝えるのみならず、樟蔭高女が学業だけではなく、当時の女性としての教養をも身に着けさせることに意を用いていたことも印象づけよう。加えて、№1本館、№2前庭や№3・4の前庭の中の植物園一部の写真、№6池畔の校舎の写真は、恵まれた自然環境のもとで教育が行われていることを見る者に訴えたに違いない。さらに言えば、植物園の写真は、樟蔭高女が重視した実物教育が実践されていることを確認させることにもなったであろう。

以上のように、絵葉書セット1のそれぞれの絵葉書は、その発行時期から考えても、樟蔭高女の設立にたずさわった人々が理想としたところ(10)を端的に表現するものになっていると言えよう。そして同時に、樟蔭高女が優れた環境と設備の整った女子教育の場であることを、対外的に発信する広告媒体としての役割をも果たすことになったであろう。

一方、絵葉書セット2については、おそらくこの七枚がこの絵葉書セットの全てではないと考えられるので、軽々な判断は慎まなければならないが、次のように考えることができる。

まず、絵葉書セット2では、№3の校旗の写真に校歌を載せた絵葉書が目を引く。校旗と校歌とが、いずれもその学校を最も象徴する存在であることについては誰しも異存のないところであろう。加えて、№1では学校の全景の写真が、また№2では正門付近の写真が、そして№3では創立十周年を記念して建設された記念館の写真が利用されている。これら三枚の絵葉書についても、やはり学園にとっては、対外的に「樟蔭ブランド」を象徴するような風景や建物のカットが利用されている。これらに加えて、№5では、一九三五年に新築され、学園を象徴する校舎の一つとして新たに加わった会館の外観写真が、そして№6ではその内部の写真が利用されている。

このように見てくると、絵葉書セット2は、一九三五年に完成したばかりの会館を含めて、言うならば、昭和一桁の時期に定着した「樟蔭ブランド」(11)を可視的に表現する要素の写真によって構成されていると言えよう。当時、これらの絵葉書を手にした人々は、関西における女子教育の担い手としての「樟蔭ブランド」を、具体的なイメージによって実感することになったのではないだろうか。そして強調するまでもなく、絵葉書セット2は、「樟蔭ブランド」の有効な広告媒体としても機能したことであろう。

Ⅱ　朝輝記太留氏関係資料

朝輝記太留（あさひ・きたる）氏は、樟蔭高女開学とともに着任し、樟蔭高女教諭、さらには樟蔭女専設立後は同校教授となり、初期の学園の教育を支える存在として活躍した。学園の周年記念誌には、樟蔭開学早々にアメリカへ留学し、その体験をもとに、樟蔭高女の体操教育を充実させるとともに、女子の登山を積極的に奨励したり、開校三年目には体操服の着用を実施するなど、それまでの女学校には見られなかった体育教育を展開していたことが紹介されている(12)。また、樟蔭高女の制

服は、朝輝氏がアメリカ留学中、一学期間授業を受講したボストンのサージャント・スクールの運動服が原型になったとも言われている（13）。かつて指摘したように、樟蔭高女・女専の体育教育の特色について考察するためには、朝輝氏の果たした役割を明らかにする必要がある（14）。

ところで、学園には、一九二〇年（大正九）から一九三五年頃の、授業の様子や通学風景、あるいは修学旅行や運動会、登山、水泳訓練等々の学園生活を撮影した16ミリフィルムが残されている（15）。かつてこれらのフィルムの一部を利用した特集番組が放送されたこともある（16）。その16ミリフィルムの撮影者もまた、朝輝氏らであった。

こうした点からするならば、学園草創期の歴史やそこで行われた教育内容について考察しようとする時、朝輝氏の活動とその役割を抜きにして考えることはできないであろう。ところが、朝輝氏の活動の具体的な様子について検討しようとすると、前述の朝輝氏らが撮影した行事の16ミリフィルムや、体育関係の学校行事を撮影した写真はあるものの―もちろんこうした動画を含む画像資料が残っていること自体が貴重であり、それらの資料的な価値と重要性については、いくら強調しても強調し過ぎることは無い―、例えば、後述する何冊か確認される朝輝氏の著述のうちの、『米國體育視察記』（17）一冊以外、大阪樟蔭女子大学図書館には所蔵されておらず、周年記念誌以上の事実を見出すには、検討の素材が極めて乏しい状況にある。こうした現状を鑑み、今年度の資料収集では、朝輝氏関係のそれを最重点の課題とした。

（1）朝輝記太留氏の経歴

それではまず、朝輝氏の経歴を学園に残る資料などから簡単に紹介しておこう。

朝輝氏は、一八七八年（明治一一）五月に、京都府加佐郡河守上村（当時）に生まれている。一八九九年（明治三二）七月に京都府師範学校を卒業し、京都府の尋常小学校本科正教員の免許状を得て、地元の小学校に訓導として勤務した。その後、陸軍で六週間の兵役を終了した後、一九〇〇年（明治三三）に京都府の小学校体操科正教員の免許状を得ている。一九〇二年（明治三五）五月には、日本体育会体操学校高等本科へ入学して翌年九月に卒業、一九〇四年（明治三七）一月に、師範学校・中学校・高等女学校体操科教員免許状を得ている（18）。日本体育会体操学校卒業後は、京都府・兵庫県内の高等小学校や尋常小学校に勤務し、一九一〇年（明治四三）九月から大阪府立夕陽丘高等女学校の教諭となった。この夕陽丘高等女学校の校長が、のちに樟蔭高女の校長となった伊賀駒吉郎氏であり、この時の伊賀氏とのつながりから、一九一八年（大正七）の樟蔭高女開学と同時に、朝輝氏は樟蔭高女教諭として着任したことが知られる（19）。

樟蔭高女に着任した朝輝氏は、その年の六月から翌一九一九年三月にかけて、先進の体育教育を視察研究するために、樟蔭高女からの派遣でアメリカへ留学している。このアメリカ留学時の記録が前記『米國體育視察記』である。朝輝氏は、樟蔭女専の設立後はその教授ともなり、樟蔭高女・女専両校の体育教育を中心を担った。

しかし、一九三七年（昭和一二）夏頃には病に倒れたようで、『職員會誌』同年年九月五日の記事には、「一、朝輝教授病気ニ付当分補欠授業ヲナス┐トセリ、（中略）一、運動會ハ朝輝教授病気ノ為実行出来ルカ否カ未ダ定メガタシ」とある。引用した二項目は、運動会の実施が朝輝氏の健康状態にかかっているとする記述であり、学園の体育行事における朝輝氏の存在の大きさが裏付けられる。さてその後、病状は好転しなかったようで、朝輝氏は、翌一九三八年（昭和一三）五月、六十歳で死去した。

以上のように、朝輝氏は、一九一八年から一九三七年の夏頃までの約二十年間にわたって、樟蔭高女・女専とその歩みをともにし、周年記念誌にも紹介されているように、両校の体育教育を支える存在として活躍したのであった。

（2）朝輝記太留氏に対する同時代評価

一九二八年（昭和三）一月に日本体育学会から発行された『近代日本體育史』（20）の中には、明治以後の体育教育貢献者の一人として朝輝氏を挙げ、写真入りで次のように紹介している（21）。前項の内容と重複するところもあるが、全文を引用しておく。

朝輝氏は明治十一年五月京都府加佐郡河守上村に生る。同三十二年七月京都府師範学校卒業。同三十三年七月陸軍六週間現役兵服務。同三十六年九月日本体育会体操学校卒業。同三十八年京都府立第二高等女学校教諭任命。同四十三年九月大阪府立夕陽丘高等女学校教諭任命。大正七年四月私立大阪樟蔭高等女学校設立当時公職を捨てゝ転任。同年六月米国体育視察の途に上り同八年三月帰朝。同十五年四月樟蔭女子専門学校の設立後主として同校の体育主任教授として現在に到り、同校教諭の職務をも一部担当してゐる。その貢献としては、体操学校卒業当時京都市及び京都府下全部に瑞典式体操の普及指導に努力した。明治四十三年頃より特に学校ダンスの研究に力を致し、米国体育視察後米国に行はるゝ学校ダンスの紹介及び研究に従事し、爾来各地方に指導のため招聘せられた。数種の著書をも有し、学校ダンスの指導に腐心してゐる者の中では比較的古い方の一人であらう。

この記事によれば、朝輝氏は、当初、スウェーデン式体操（22）の指導者として力を尽くし、その後は、学校ダンスの指導者として活躍していたことが判る。しかも学校ダンスの指導者として朝輝氏は先駆的な人物であり、その活動は、アメリカ留学後いっそう顕著になっていたこともうかがえよう。

また、『近代日本體育史』には次のような記述もある（23）。

一方體育ダンスの方面に於ては朝輝記（ママ・太）留氏や荒木直範氏や澁井二夫氏等の如き熱心家が簇出して、朝輝氏は職を大阪府下樟蔭高等女学校に奉する傍ら、其の普及のために東奔西走し、（中略）時の文相岡田良平氏は以上の藝術的童謡舞踊の流行や、又はダンス演舞より醸生せらるゝところの退廃的国民思想の弊毒を未然に防止せんとして、其の抑壓的訓示を發したが滔々たる大勢は遂に何等の効果

はなかつたのである。而して斯くの如き傾向（芸術的体育思潮：白川注）の勃興し来つたのは大正十年前後からの事であるが、（後略）

ここでも、当時の政府の方針とは異なって、朝輝氏が熱心に学校における体育ダンスの普及に努めていることが判る。

このように、大正後半から昭和初期にかけて、朝輝氏は、学校体育にダンス教育を普及させるのに大きな功績のあった人物として評価されていたのである。

周年記念誌などでは、登山の奨励などにうかがわれる朝輝氏の極めて特徴的な一面にのみ目を奪われがちであるが(24)、やはり、教員、あるいは体育教育の側面からするならば、この学校ダンス教育の指導者としての位置を確認しておくことが、まず必要であろう。実際、学園外に残る朝輝氏関係の資料は、現在のところ学校ダンス関係のものが多いようである。それでは次に、未だ現物を入手することができていないものが多いが、現在確認できている朝輝氏関係の資料を紹介しよう。

第1表 『體育的學校ダンス』の内容

No.	『體育的學校ダンス』b目次	備考
1	チヤイムス オブ ダンカーク	○
2	シユーメイカー ダンス	○
3	クラツブ ダンス	○
4	チルドレンス ポルカ	○
5	ダンス オブ グリーテイング	○
6	ハイランド ホツピング	○
7	ブレーキング	○
8	チエボガー	○
9	ハウ ドウ ユウ ドウ	○
10	ジヤムブ ジム クロウ	○
11	ニツポン アルプス マーチ	○
12	タントリー	○
13	フレンチ リール	○
14	エース オブ ダイアモンド	○
15	リーフ ザ フラツクス	○
16	ニグロ ダンス	○
17	カマリンスカイア	○
18	サークル ダンス	
19	リング ダンス	
20	オツクス ダンス	
21	リボン ダンス	
22	バアン ダンス フオーア スリー	
23	ハンセル エンド グレーテル	
24	アスレテイツク ダンス	
25	セント パトリツクスデー	
26	ジヤンピング ジヤツク ダンス	
27	スキデイシユ ポルカ	
28	ダンス オバー ゼアー	□
29	ケテー ダンス	
30	ハーベスト フローリツク	
31	ザ ノーブルマン	
32	ラツシース ダンス	
33	コサツク ダンス	
34	ダンス オブ サンビームス	△
35	メーボール ダンス	△
36	ル アール ポルカ	△
37	ホツプ モーア アンニカ	△
38	クゼルカ	△

注）1.「備考」欄○印は、『學校體育の新教材』第二部「行進遊戯」（全18種類）に確認できるダンス。
2.「備考」欄△印は、『體育的學校ダンス』aには載せられていないダンス。
3.「備考」欄□印は、『樟の葉蔭に』vol.8所収の1929年（昭和4）度運動会のプログラムにおいて確認することができるダンス。

（3）朝輝氏と学校ダンス

①『體育的学校ダンス』（a一九二四年（大正一三）・b一九二八年（昭和三）、いずれも非売品）

本書は、学校体育の教材たり得るダンスの種目に動作の解説を加え、楽譜とともに掲載、編集したものである。この編集形式は、後掲の『學校體育の新教材』の「行進遊戯」の部分を踏襲している。この本については、三十三種類のダンスを載せるaと三十八種類のダンスを載せるbの二点を入手した。aとbとで収録されたダンス数が異なっているのは、bがaを補充したものであることによるのであろう。なお、収録されたダンスの詳細については、第1表を参照されたい。

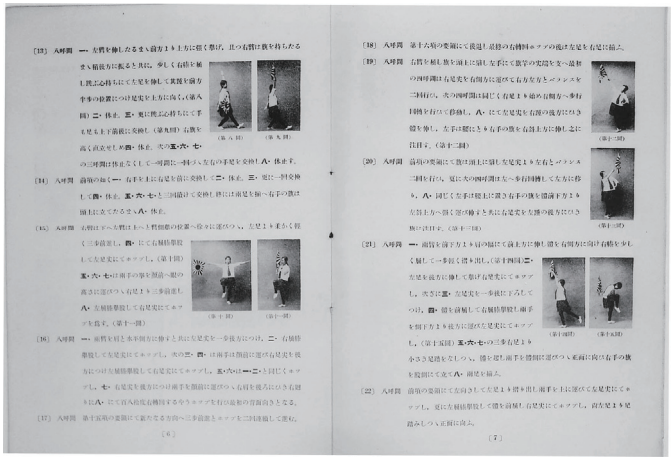
②『扶桑行進』（a山田謄写堂、一九二九年（昭和四）カ・b青々書院、一九三〇年（昭和五））

本書についても、山田謄写堂で謄写版印刷されたaと、一九三〇年に青々書院よりカラーで発行されたb（写真②b―1）、二点を入手した。内容はいずれも、「はしがき」と扶桑歌の楽譜、動作の解説からなっている。ただし青々書院版は、動作の解説に写真が入り、解り易くなっている（写真②b―2）。

写真②b―1

ここでは、「はしがき」を引用、紹介しておこう。

この扶桑の曲譜は我が陸軍の觀兵式に於ける徒歩部隊の行進曲として、明治三十五年に制定せられたのであるが、恰も予が日本體育會體操學校に入學したのと歳を同じくして居るのである。其秋十一月三日青山錬兵場に於て天長節の觀兵式を行はせらるゝに當り、明治大帝が親しく數萬の貔貅を閲せらるゝ壯觀なる式典を始めて拜觀するを得て、たゞ涙の感激にうたれたのであつた。爾来觀兵式には今も尚この曲譜が吹奏されて居るが、之を耳にする度に身は



写真②b―2

明治天皇の御前にあるの思ひが湧き出づるのである。蓋し幼時小學校に學びし頃、當時軍歌と稱して〝我が官軍我が敵は……天地容れざる朝敵ぞ〟〔抜刀隊の歌〕といふ曲は盛んに歌つたのであるが、これ即ち扶桑歌行進曲の骨子をなして居るのであるから特に深き印象を與へられて居るのである。

昨秋京都に於て御即位の大禮を擧げさせられた我が　聖上陛下には御歸東の直後、二重橋前の廣場に於て東京府市を中心にその近縣の男女學生、青年團、在鄕軍人、處女會員等、將來國家を其双肩に荷ふべき若人達を　畏くも御親閲あらせられ、更に本年初夏特に關西に行幸遊されし際、六月五日午後二時より大阪城東錬兵場に於て大阪、京都の二府、滋賀、三重、奈良、和歌山、兵庫の各縣より集れる男女學生、青年團、在鄕軍人及處女會員等を御親閲遊され、男子は等しく扶桑歌の行進曲につれて　陛下の御前に分列式を行ひ、女子は奉迎歌を奉唱し赤子の熱誠を致したのであつたが、予も亦陪觀の光榮に浴し、只管　上御一人の御聖德に報ひまつらんことを腦裡に更に深く刻んだのであつた。

如上の意味に於て空前の御親閲を記念せんため、扶桑歌の曲を基礎として聊か學校體育の教材たらしめんために作技したのである、幸に汎く普及さるゝならば、單に予一人の光榮のみでないと思惟するのである。

昭和四年七月二十一日

日本アルプス白馬岳及黑部谿谷の踏破を了へて　朝輝記太留誌す

前半では、扶桑歌の由来とそれに対する朝輝氏個人の思い出が述べられ、後半では、扶桑歌に作技して体育教材とした経緯が記されている。後半部分から、作技の直接の契機は、一九二九年六月、昭和天皇が大阪城東練兵場で学生、青年団、在郷軍人会、処女会会員らを親閲したのを陪観したことだったことが判る。また、もちろん朝輝氏の個人的な要素も考慮する必要があるが、当時の社会情勢を反映して、文章全体に天皇を中心とした国家主義的色合いの濃さが感じられる。学校体育の教材として「扶桑行進」を採用すれば、意図するか否かを問わず、国家主義的な教育を助長するものとなったであろうことは確認しておかなければならない。ちなみに樟蔭においては、一九二九年度の運動会において、この「扶桑行進」が演じられている(25)。

③現物未収集資料

現物を収集できたのは、右の二種類四点にとどまるが、それらを収集する過程で、他にも朝輝氏の著述があることを知った。以下、今後の調査・収集の手がかりとしての意味も兼ねて、それらについて紹介しておく。

a『學校體育の新教材』（大鎧閣、一九二一年（大正一〇））

本書については、『米國體育視察記』巻末の広告によってその存在を知り、『近代日本體育史』の中の「大正後半期」（大正九～末年）の学校体育関係文献を紹介する中にもあったことから(26)、その検討の必要性を認識していた。本書が大阪教育大学付属図書館に収蔵されていることを知り、閲覧することができた。なお、本書は、発行が一九二一年（大

正一〇）六月、出版が大鎧閣と、いずれも『米國體育視察記』と同一である。『米國體育視察記』が留学中の視察日記であるのに対して、本書は視察で得た知見に基づく専門書で、両者を一体のものと見なすべきであろう。

さて、この本は、朝輝氏が留学中に取材した当時のアメリカの体育教材に関して、朝輝氏の実践を踏まえながら、分類紹介したものである。第2表に示したように、それらを「韻律的體操」「行進遊戯」「競走遊戯」の三つに分けて紹介してある。おそらく、紹介された内容が、樟蔭高女・女専の体育教育の中核を成したものと判断して良いだろう。

以下、ここでは「自序」の後半を引用、紹介しておく。朝輝氏が視察した各地を紹介した後、次のように記す。

（前略）

惟ふに米國一般の教育主義が獨立自由を尊重して所謂自發活動を與へ、自治の美風に訓化せしめつゝあるは、蓋し彼の國が建國の當初より採れる國是に據る所なるが、特に學校體育の趨勢は、過去拾數年間、我が國が殆んど瑞典式體操のみを課して、學校體育の全目的を達したりと思惟せるが如き舊思潮は既に昔日の夢と葬られ、現今は教材を多方面より採り、精神訓練の方策としては、我が國の

第2表 『學校體育の新教材』の内容

目次			備考
第一部 韻律的体操	1	音律体操	
	2	調律体操	
	3	ワンヅ体操	
	4	唖鈴体操	○
第二部 行進遊戯	1	チヤイムス オブ ダンカーク	
	2	シユーメイカー ダンス	
	3	クラツブ ダンス	
	4	チルドレンス ポルカ	
	5	ダンス オブ グリーテイング	
	6	ハイランド ホツピング	
	7	ブレーキング	
	8	チエボガー	
	9	ハウ ドウ ユウ ドウ	
	10	ワッシング ジー クロス	×
	11	ジヤムブ ジム クロウ	
	12	ニツポン アルプス マーチ	
	13	タントリー	
	14	フレンチ リール	
	15	エース オブ ダイアモンド	
	16	リーフ ジー フラツクス	
	17	ニグロ ダンス	
	18	カマリンスカイア	
第三部 競走遊技	1	インデイアン フアイルレース	
	2	シヤツトル リレー	
	3	オール アツプ リレー	
	4	パーシツト レース	
	5	ゴール シヨツテイング リレー	
	6	スロウ エンド キヤツチ リレー	
	7	ボール スローキング	
	8	キツク ボール	○
	9	ワン トウ スリー	
	10	ジャン ピング リレー	

注1.「備考」欄×印は、『體育的學校ダンス』に収録されていないダンス。
2.「備考」欄○印は、『樟の葉蔭に』vol.8所収の1929年（昭和4）度運動会のプログラムにおいて確認できる種目。

如く威壓的に自治を強ふるが如き手段を避くると同時に、特に身體の機敏、耐久、巧緻の諸性を養ひ兼ねて美的修練をも課して、眞に人類として身體活動の全能力を發揮せしむるに努力せるものゝ如し。

此の趣旨は啻に合衆國々民のみの體育方法として對岸の火災視すべきものにあらず、世界大戦後、國家改造の必要を是認せる我が國に於ても、必ずや國民體育の上に舊來の弊風を打破して、彼れの長を採り、之を斟酌して完璧を期するは目下の最大急務なりと信ず。爰に聊か視察中各種の學校に於て實施したる教材中、有効にして而も簡易、直ちに採りて我が國の學校體育教材となし得べきものを親しく實験し、其一部を上梓して斯界に紹介せんとす、幸ひに我が國の學校體育改善の階梯として其の一歩を作り得ば、著者の光榮之に過ぎざるべし。

アメリカの当時の学校体育の現状を、教材を多方面に求めながら、身体の様々な特性を涵養するとともに美的な修練を課して、身体能力が発揮できるようにすることを目指して行われていると分析していることが判る。それに対して、スウェーデン式体操を課していれば学校体育の目的を達したかのように認識する日本の現状を批判し、アメリカにおける学校体育の方法が、今後の日本においても必要かつ有効なものであることを主張している。アメリカ留学によって、当時最先端の学校体育の理論と実践を学んだことを一つの契機として、旧態然たる日本の学校体育教育の革新を目指す、朝輝氏の意図と意欲とを読み取ることは容易であろう。そして、こうした考えを朝輝氏が実践されていっていたことが、先に紹介した『近代日本體育史』における朝輝氏に対する評価(27)からも裏付けられよう。

右に述べたような考えを有する朝輝氏の指導の下で行われた樟蔭の体育教育は、当然、当時の最先端を行くそれとなったであろう。そしてその具体的内容の中心となったのが、これまでに述べてきたことからも明らかになるように、ダンスであったのである。

b『改正要目準拠　行進遊戯新教材』（大正書院、一九二六年（大正一五））

本書は、『近代日本體育史』が紹介する「大正後半期」の学校体育関係文献の中に、遊戯および競技に関するものの一つとして、「本書は四六倍版九一頁の美装本で、曲譜と写真と解説とで満してある」(28)と取り上げられている。なお、この本は、国立国会図書館に蔵されていることが確認された。

c『體育ダンス　敷島行進』（青々書院、一九三〇年（昭和五））

d『御大典奉祝記念行進遊戯　菊の薫』（青々書院、一九二八年（昭和三））カ）

c及びdは、先に紹介した青々書院版『扶桑行進』巻末の広告で確認された。それには、それぞれ次のように広告している。

c最新作技『敷島行進』朝輝記太留作技・前海軍々樂長瀬戸口藤吉作曲

敷島艦行進曲は明治三十六年、同艦の竣功と共に英國より横須賀

に回航せられ、我が海軍に一大威力を増加せしを祝して、海軍行進曲の第四番目の曲として瀬戸口樂長の作曲にかゝる名曲たり、本年は日本海々戦に於て空前の大捷を得て國威を發揚せし滿二十五年の記念すべき歳たり、昨年發表したる陸軍の扶桑曲の姉妹篇とし、英國の民族ダンスとして古くより行はるゝ「セイラース、ホーンパイプ」を基礎とし、我が海軍獨特の動作を配し、學校體育の教材として考案作技せり、これによりて海軍思想の普及向上と共に、扶桑行進と等しく益々國家的觀念の養成に勗めんとするものなり。師範學校、女學校、小學校を通じ國體運動として又秋季運動會等に於ける演技材料として最も適切なる行進遊戯たり。

d重版御大典奉祝記念行進遊戯『菊の薫』朝輝記太留作技・大阪市市岡高等女學校嘱託杉江秀作曲

昭和三年中秋、畏くも　我今上陛下には曠古の盛儀たる御即位の大典を京都の地に擧げさせ給ふや瑞雲爲に全土を覆ひ國民擧つて壽ぎ奉らぬはなかりき。

此秋に當り些か奉祝の微意を表せんがため現代教育的體育ダンスの第一人者朝輝記太留先生を煩はし、曲を關西樂壇の耆宿杉江秀先生に委囑し愼重按舞せられしもの即ち本書なり。

本書の發兌當時實の數萬部を賣盡したるが國民として永く此の御盛典を記念せんがため各方面よりの慫慂に從ひ今回更に重版することゝしたり。

曲及び技、何れも簡易平明且優美にして何人も容易に演技し得るが故に師範學校、女學校、小學校に於ける秋期體育運動會等の演技材料として最も好適のものなりとす。

乞ふ本技の演出により洽ねく聖壽の萬歳を祈られんことを。

発表されたのは、d・cの順となるが、両方とも先に紹介した『扶桑行進』に連なるものであることは疑いない。dは、昭和天皇の即位を記念して、朝輝氏と市岡高等女学校の杉江秀氏とにって制作されたものであり、cは、陸軍の行進曲「扶桑歌」に作技した『扶桑行進』の姉妹編として、海軍の行進曲「敷島艦行進曲」に朝輝氏が作技したものである。『扶桑行進』を含めて三書(三ダンス)とも、昭和天皇の即位を契機として、当時高揚しつつある国家主義的思想を映し出す形で生み出されたものと言える。cの広告記事中にある「益々國家的観念の養成に勗めんとするものなり」という文言がそれを象徴する。

ところで、これらのダンスは、各種学校の体操の授業や運動会と演目として採用されることによって、学校教育の中で、天皇を中心とする国家主義的思想や軍国思想を、児童・生徒に扶植し、拡大する役割を担ったであろう。朝輝氏が、その過程で果たした役割の小さくないことをここで確認しておかなければならない。朝輝氏の指導によって行われた樟蔭高女・女専の体育教育―ダンス教育は、一面において、明らかに国家主義的要素を含んでいたのである。当時の樟蔭の体育教育が、かかる意味においても、「最先端」あったことを認識しなければならない。

ところで、広告記事によればdは、初版発売時に数万部を売り尽くしたという。昭和天皇の即位を記念するという趣旨を考えれば、ある種ブ

ームの中で売り上げが伸びたのであろうが、その普及の度合いが推測される。「現代教育的體育ダンスの第一人者朝輝記太留先生」という表現もあながち大げさなものではないのであろう。改めて、著名な学校ダンスの指導者としての朝輝氏の位置、学校ダンス教育に対する影響力の大きさを確認したい。この点からしても、先に指摘した当時の体育教育の中で、朝輝氏が結果的に国家主義的思想を助長する役割を担ったという点を見過ごすことはできないだろう。

e『瑞典式体操』（教育思潮社、一九〇五年（明治三八））

f『凱旋舞』（森江本店、一九〇六年（明治三九））

g『小学読本唱歌適用遊戯法』（大阪開成館、一九一〇年（明治四三））

樟蔭高女赴任前の著述としては、右の三書があった。これら三書はいずれも国立国会図書館に蔵されていることを確認している。e・fは、日本体育会体操学校卒業後すぐのもので、朝輝氏がその頃から精力的に研究活動をおこなったいたことをうかがわせる。

また、このうちeは、『近代日本體育史』の一八九九・一九〇〇年頃～一九〇七年（明治四〇）までを扱った章の学校体育関係文献の中で学校体操に関するものとして取り上げられている(29)。この本の存在からも、明治三十年代における日本へのスウェーデン式体操の導入において、朝輝氏が果たした役割を推測することができよう。

④小括

以上、縷々述べてきたように、学外に残る朝輝氏関係の資料、主としてその著述からは、教員生活の初期には主としてスウェーデン式体操普及のために活動する体操教員としての側面が、また樟蔭高女着任前後の時期からは、体操の中でも、とりわけダンスを教材とした学校体育の指導者として側面が浮かび上がってくる。既に指摘したように、朝輝氏の業績、ひいては樟蔭高女・女専における体育教育について考察しようとするならば、やはりこの体操、学校ダンスの指導者として側面を軸として論じる必要があると考える。

一九二七年に樟蔭高女に入学し、朝輝氏から直接指導を受けた卒業生は次のように述べている(30)。

それから運動会のときに、学生に創作ダンスをさされましてね、あちこちの学校の先生方が見に来られるから、みんなしっかりやれと言われたことがあるんです。自分で作ったダンスをこの学校の運動会にさせて、それをまたあちこちの学校へ講習に行かれたらしいです。ですから小学校の先生なんかでも、朝輝先生といえばみんなご存じでした。

樟蔭において朝輝氏が行ったダンス教育の内容は、この証言にある講習会や本稿で紹介した朝輝氏の著述を通して、当時、最先端のものとして広く学外へも紹介されていたのである。そして、そうした活動を通して朝輝氏は、小学校教員の間では学校ダンスの著名な指導者、第一人者として広く知られていたのである。朝輝氏によって行われた体育教育―学校ダンス―は、他校へも影響を及ぼすような内容を有するものであった。ここにおいても樟蔭高女・女専における体育教育が、当時の最先端を行くものであったことが改めて確認できよう。

おわりに

本稿では、筆者がこれまでに収集することができた学園関係資料の紹介を通して、大正から昭和初期にかけての学園の具体的な姿の一端を明らかにしてきた。絵葉書セットからは、それぞれが発行された時期の学園の優れた施設・設備の様子を確認することができるが、そこに写し出されたものを通して、創立に関わった人々の理想や「樟蔭ブランド」を具体的なイメージとして実感することが可能であることを指摘した。また、朝輝氏関係の資料を収集することで、朝輝氏の体操教師として位置と、朝輝氏が樟蔭高女・女専において行った体育教育、とりわけ学校ダンスが、当時の「最先端」―ここにはいろいろな意味が含まれるが―の内容を有するものであることが確認された。

絵葉書に関しては、収集したもの以外にも存在することが確認されており(31)、それらの検討も今後必要である。また、朝輝氏の行った体育教育に関しては、さらに一歩進めて、現在未収集の資料の分析も踏まえた上で、日本における近代体育教育の展開の中に位置付け直して行く作業を行わなければならないだろう。朝輝氏と氏の行った体育教育全体を対象とした本格的な分析は今後の大きな課題である。なお、記念館の学園資料展示室には、朝輝氏が亡くなられた後、学園に寄贈せられたアルバム三冊が残されており、当然それらも検討対象となってこよう。現在、その整理も並行して進めており、その結果を一日も早く紹介しなければならないと考えている。この作業に関しては、共同研究者である竹内さおり氏の別稿を参照されたい(32)。

筆者は、学園資料の調査、分析の作業を進めれば進めるほど、学園に残された資料の重要性、貴重性についての認識を新たにしている。来たる二〇〇七年、学園は創立九十周年を迎える。筆者の作業の進行は遅々たるものではあるが、それに向けて、さらに資料の整理と〝再発見〟、そしてその分析に努めて行きたい。

注

(1) データベース化の作業については、共同研究者である竹内さおり氏の「『設立ニ関スル書類』のデジタル化とデータベース試作の取り組み―樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用(2)―」(『大阪樟蔭女子大学(学芸学部)論集』第四二号、二〇〇五年)・「『樟蔭學報』のデジタル化とデータベース試作の取り組み―樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用(4)―」(『大阪樟蔭女子大学(学芸学部)論集』第四三号、二〇〇六年)参照。なお現在、試作品ではあるが『樟蔭學報』のデータベースが完成している。

(2) 拙稿「『職員会誌』から見た昭和初期の樟蔭女子専門学校―樟蔭　学園草創期資料のデータベース化とその活用(1)―」(『大阪樟蔭女子大学(学芸学部)論集』第四二号、二〇〇五年、以下「白川05」と記す)・「『樟蔭學報』に見る昭和戦前期の樟蔭学園―樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用(3)―」(『大阪樟蔭女子大学(学芸学部)論集』第四三号、二〇〇六年、以下「白川06」と記す)。

(3) 絵葉書セット1は二十枚からなるが、同じもの(№16)が二枚あり、十九

枚で一セットなのか、あるいは別の一枚があって二十枚で一セットになるのか、といったセットの内容構成ついては、現在のところ不明であり、今後、検討したい。

（4）伏見宮の来校については、『創立二十五周年紀念　樟蔭学園沿革略論』（樟蔭女子學園、一九四二年、以下「『25周年誌』」と記す）六ページ、扁額の下賜については、伊賀駒吉郎「本校創立経過一斑」（『樟蔭』第一号（私立樟蔭高等女学校校友会、一九一九年）二五ページ）参照。

（5）この絵葉書セット2は、七枚であるが、七枚がセットの全てではなく、おそらく他の絵葉書も存在していたものと推測する。

（6）『25周年誌』一五ページ。

（7）『25周年誌』二〇ページ。

（8）この富岡鉄斎の「富嶽図」については、『樟蔭学園80周年記念誌』（一九九七年、以下「『80周年誌』と記す）二五ページ参照。なおこの絵は、現在、大阪樟蔭女子大学図書館一階ロビーに飾られている。

（9）橋爪紳也『絵はがき１００年　近代日本のビジュアル・メディア』（朝日新聞社、二〇〇六年）八九～九四ページ。

（10）伊賀駒吉郎『回顧七十有五年』（樟蔭女子専門学校出版部、一九四三年）一〇九～一一七ページ参照。

（11）白川05・06参照。

（12）『80周年誌』二一ページ。

（13）『80周年誌』二一ページ。

（14）白川06一八ページ。

（15）現在、これらの映像は、学園所蔵ＤＶＤ『樟の葉蔭に』に収録されている。

（16）ＮＨＫ教育テレビ『教養特集 映像の証言・大正の女学生』（一九七六年（昭和五一）七月三日放送）。『80周年誌』三三ページ参照。なお、この番組は、現在、学園所蔵ＤＶＤ『樟の葉蔭に』vol.1で見ることができる。

（17）『米國體育視察記』（大鎧閣、一九二一年）。

（18）日本体育会は、一八九一年（明治二四）に陸軍出身の日高藤吉郎らによって、国民体育の振興を目的として設立された組織。その日本体育会の主要な事業の一つが、体操教員を養成する体操学校であった。体操学校は、一八九三年（明治二六）に設立された「體操練習所」にはじまり、一九〇〇年（明治三三）に改称して「體操学校」となった。翌年には、師範・中学・高等女学校の体操科教員無試験検定の出願資格を得、多くの体育指導者を輩出した（竹之下休蔵『体育五十年』（時事通信社、一九五〇年）三九～四〇ページ参照）。

（19）『米國體育視察記』「はじめに」三ページ。

（20）眞行寺朗生・吉原藤助著『近代日本體育史』（日本体育学会、一九二八年）。本書は『日本体育基本文献集―大正・昭和戦前期―』第八集（日本図書センター、一九九七年）として復刻されている。

（21）前掲注（20）書六五五～六五六ページ。

（22）手具を使った軽体操で、整頓法、身体矯正術、徒手・唖鈴・球竿・棍棒・木環・豆嚢体操などを内容とする（前掲注（18）竹之下『体　育五十年』一八ページ参照）。日本に本格的に紹介されたのは明治三十年代のこと。まず川瀬元九郎がアメリカから導入、日本体育会体操学校で熱心に提唱した。

さらに少し遅れて、井口あくりがより理論的、実際的に伝えた。これ以後、それまでの普通体操は後退し、スウェーデン式体操が学校体育の大きな部分を占めることになる（今村嘉雄『日本体育史』（不昧堂出版、一九七〇年）四五六～四五八ページ参照）。

（23）前掲注（20）書四五七ページ。

（24）朝輝氏は日本山岳会の会員でもあり、その点からすればそうした活動も決して不思議ではなく、大正～昭和初期に女性（高等女学校の生徒）に登山を奨励したことは画期的であり、特筆すべきことであることは言うまでもない。

（25）学園所蔵ＤＶＤ『樟の葉蔭に』vol.８に収められた「第九回運動会実況」によって、樟蔭高女三年の演目として「扶桑行進」が行われていることを確認できる。

（26）前掲注（20）書四〇一ページ。

（27）前掲注（21）（23）に同じ。

（28）前掲注（20）書四三四ページ。

（29）前掲注（20）書一三九ページ。

（30）「座談会　樟蔭学園・過去・現在・未来」における山下幸子氏（一九二七年（昭和二）入学）の発言（樟蔭学園創立六十周年記念誌『樟の年輪』（一九七七年）四三ページ）。

（31）本稿執筆中に、昭和初期頃の運動会の絵葉書セットが存在することを知った。

（32）竹内さおり「『朝輝記太留氏関連写真資料』のデジタル化と資料整理におけるＱＲコード利用―樟蔭学園草創期資料のデータベース化とその活用（６）―」（『大阪樟蔭女子大学（学芸学部）論集』四四号、二〇〇七年）。

〔付記〕本稿は、二〇〇三～〇六年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費による成果の一部である。

関係資料の閲覧については、中尾保久樟蔭学園総務部長に便宜をお図りいただいた。また中尾部長からは、各種の情報も御提供をいただいた。ここに記して御礼を申し上げます。